JCCA

社団法人建設コンサルタンツ協会
九州支部
支部だより
vol.19
2005.2

Kyushu Branch, Japan Civil Engineering Consultants Association

広い視野で大地を臨み
新しい視点、新しい発想で
機会(チャンス)をねらう。

福岡

柳川の歴史と堀割文化

(株) 建設技術センター
代表取締役社長　大津　茂

季節は晩秋、毎年白秋の命日の前日11月1日から3日まで、「白秋祭」が開催されています。ホウズキ提灯やアンドンで飾られた百数十隻のどんこ舟に乗った人々、白秋作詞の童謡のコーラスや演奏、そして川岸のかがり火、仕掛け花火など、私はこのどんこ舟に乗るたびに、先人達のすさまじい土木事業に対する情熱に敬服し、同時にこの水郷柳川というまちのもつエネルギーに魅了されます。私の故郷である福岡県南部の有明海に面した水郷柳川をここに紹介致します。

有明海沿岸に人が住み始めたのは、今から約2000年前の弥生時代。初めてこの土地に堀割ができたのもちょうどそのころといわれています。柳川は、有明海の潮の満ち引きがつくった低くてじめじめした土地だったので、農作物を作ることができませんでした。そこで、人々は大地に溝（堀）を掘って土地を乾かし、その溝（堀）に溜まった雨水を利用して農作物を育てるようになったのです。このようにして出来ていった堀には、やがて魚類が生息し、堀にたまった泥土は掘りあげては肥料とし、水路としての舟の運行にも利用されました。

北原白秋

堀割が広く深くつくられていくにつれて、人々の暮らしはどんどん豊かにもなっていきました。現在の堀割の形になるまでには気の遠くなるような年月を経て、先人たちが風土の悪条件と闘い、試行錯誤を繰り返しながら独特な「水の制御システム」をつくり、このシステムを生活の中でとりいれ、常に水と共生していく精神のなかで形成されたものです。

今日では総延長470kmにも及ぶ大小の堀割が網の目のように巡り、独自な水郷風景を形成しています。この堀割は現代に残された歴史的文化遺産といえるものであり、それがもつ独特な情緒は詩聖・北原白秋の詩歌の母体にもなっています。

ところが昭和30年代以降、それまで絶やしたことのなかった川や堀との付き合いを捨て去ってしまい、急激な堀の荒廃が進みました。その結果、市民の生活を支え、やすらぎや潤いをもたらしてくれた川や堀は、一転して生活環境を阻害するようになりました。

そこで柳川市では故広松伝氏を中心に、昭和52年から住民参加で河川浄化運動に着手し、川や堀とのつき合いを再開しました。市民と行政の二人三脚で取り組んだ結果、昭和40年代のみじめだった柳川の堀がよみがえったのです。この住民を巻き込んだ活動は、ドキュメンタリー映画「柳川堀割物語（宮崎駿制作）」でも広く紹介されていますので、機会があればぜひご覧ください。

十数年前の掘
ゴミ捨て場と化し、悪臭や蚊・ハエが大発生していた。

近年の柳川市は、この歴史的文化遺産ともいえる堀割を利用し、どんこ舟の旅「川下り」を中心とした観光産業に特に力を入れています。しかし、「川下り」の生命ともいえる水質については、まだ往時とは程遠く、この堀割を守っていくために平成11年に「水の憲法」（条例）ができました。この条例では、①水質保全②親水性の確保③緑・景観の保全④環境教育の振興等を基本としています。そしてこの「水の憲法」を中心にした街づくりや堀割と水の大切さを見直そうと「堀割の日」（4月第3日曜日）も設定し、この日はみんなで堀割の大掃除や講演会の計画、あるいは大人から子供まで家族みんなで参加できる楽しい行事等も盛んに行われています。

この柳川の地で、人の歴史とともに歩み続けてきたこの貴重な財産を再びきれいなものにして、後生に引き継いでいくこと－土木技術者として微力ながら貢献していきたいと思いつつ、有明海の珍味を肴に、故郷が柳川であったことを幸せに懐うこの頃です。

水と親しむ「掘ンピック」

水郷柳河こそは、
我が生れの里である。
この水の柳河こそは、
我が詩歌の母體である。

「水の構図」より抜粋

「白秋祭」のどんこ舟

掘清掃活動風景